市民が創る

まあるいココロ あったかメッセージ'16

～私の心にひびいたあのシーン～

三木市人権・同和教育協議会

妖精のメロディー

実ひとつ　残された柿の木に
北風に吹かれ　二羽のカラスがとまっています

まばゆい夕陽に照らされ
ススキの穂が　銀色に輝き揺れています

日々のくらしの中で　なにげない風景に立ちどまるたび
あなたの心に　小さな、愛しいいのちのメロディーが
ころころ　と、流れていきます

すると　瞬く間に
透明な羽をつけた　かわいい妖精が生まれます

妖精の子どもたちは　月夜に勢ぞろいして
大きなキノコのまわりを　幸せいっぱい
いつまでもダンスをしてみせます

きっとあなたも出会えるはず
幸せの妖精たちに
まあるい、まるい月の夜に

入学式で１年生といっしょに入場した時、私と手をつないだ子が私の手を「キュッ」とにぎった。

「本当の６年生になれたんだ。たよられているんだ。しっかりしないと」と思うと、うれしくなった。

学校でけんかをしている友達がいた。それを見た友達が間に入ってけんかをとめた。けんかはなかなかとまらなかったけど、その友達はいっしょうけんめいとめていた。

ぼくはけんかがきらいです。ぼくはけんかをしません。そして、ぼくはけんかをとめられません。とめに入れる友達は、つよくてうらやましいです。

外出しているとき、なにかのしょうがいで背が低い大人の人に対して私は「変だ」と母に言った。その時「そう言われる相手の気持ちになってん。いややろ」と注意された時。

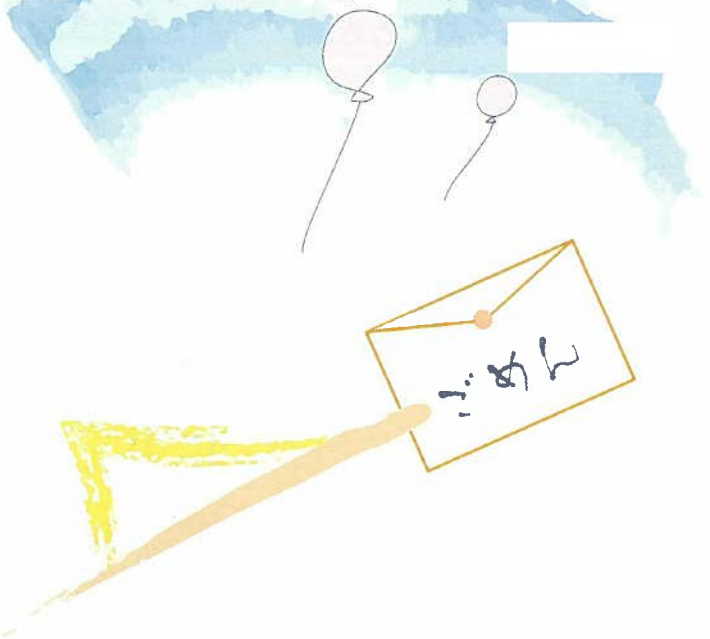
生まれたときからしょうがいのある人がたくさんいるのを分かっているのに「変だ」と思った自分が恥ずかしくなった。

私は友達の中に、少しにがてな子がいました。その子のことを、すこし、友達に言ってしまいました。でも、その友達は、「私は、その子が好き。なぜなら、やさしいし、気くばりが、じょうず」と言われた時。

私は、自分から、その子に、まえよりいっぱい話しかけたり、いっぱい遊んだり、そうしたら、だんだんとその子のいい所が見つかってきました。今では、大の仲よしです。

お姉ちゃんとけんかしたとき「ごめん」と書いた紙飛行機が飛んできた。

すぐに、なかなおりできたし、いいにくい時は文章にしてもいいとわかった。



ぼくが習っているサッカーのことでなやんでいるとき、お母さんが、「自信もってがんばり。お母さんは、あんたが失敗しても、いつまでもおうえんするから。かんぺきな人なんておらへん」といってくれたとき。

お母さんがこんなにも思ってくれているから、なやまずに自信を持ってしたいと思った。

私は、走るのがにがてだと思っていました。なので陸上をやるか、やらないか、まよっていて、お父さんに、「なやんでいるならやったら？やらんかったら後かいするかもしれへんで」と言われたとき。

そして、やると、とても速く走れるようになり、大会にも出ることができた。これから、なやんだら何でもちょうせんしてみようと思います。

車に乗っている時、車イスに乗ったおばあさんがおうだん歩道のわたりきる所で、歩道のだんさでいけなかった時、車が４台位とまっていた。私の乗っていた車は３台目で、４台目の人が車をおりて、そのおばあさんの車イスをおしてあげていたとき。

私は「おそいなぁ」と思っていたけど、うしろの車の人が助けてあげたとき、私が早く助けてあげれば良かったとおもった。

かいだんの前で、足の不自由なおばあちゃんがこまっていたとき、20才ぐらいの男の人がおんぶしたとき。

こまっているのに、たすけられなかったことが今でもこうかいして心の中がいっぱいになった。だから、こまっている人をみたら、たすけてあげたいです。

うわさで、中学校で一緒になる友達は、きつい子だったり危ない子ばかりだと聞いて不安になっていたけど、話しかけてみると皆優しくて、とても仲良くできる子ばかりだったこと。

うわさとかで決めつけるのは良くないと思った。それに皆、人間は誰もがきっと優しい気持ちを持っているから、私からも積極的に仲よくしていきたいと思った。

お店のレジで、お金をはらっていたおばさんが、500円玉を落としたのに気がついていませんでした。ほかのお客さんもいたし、だれかが言ってあげるかなと思ったけど、だれも言わなかったので、ぼくは、はずかしかったけど、500円玉をひろって、おばさんに「落ちましたよ」と言って渡しました。そしたら「あっ、ありがとう」と、すごくうれしそうに言ってくれました。

だれかが言ってくれるだろうと思っていたら、もしかしたら500円は、そのままだったかもしれないし、おばさんが困っていたかもしれません。だから、自分が気がついた事は、その時にきちんと伝えるのが大事だと思いました。ぼくがうっかりおとし物をした時も、そんなふうにしてもらうとすごく助かるし、うれしいです。ちょっとした事で、みんながきもちのよい世の中になると思いました。

給食の終わりの時間に、牛乳のバケツが片づけられていなかったとき、Dくんが当番ではないのに何も言わずに一人で片づけていた。

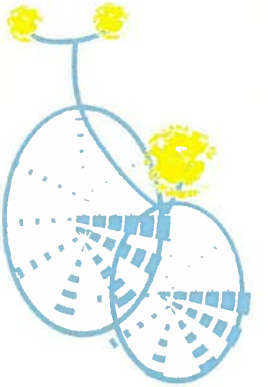
私は、バケツなどがあっても放っておいて、誰かがやってくれるだろうと思っていたけれど、Dくんの行動を見て、水がおちていたらふくなど、小さなことからできるようになった。

「おはようございます」大きな声で言った。返事はなかった。そのおばあさんは何かを落とした。拾ってやるもんかと思った。すると、小さい子がおばあさんに、その何かを大きな声で呼んでわたした。

もしかしたら、そのおばあさんには私の声が聞こえていなかったのかもしれない。こういう事が差別などにつながってしまうのかもしれないと、心から深く反省した。

雨の登校中、道の真ん中で、自転車でころんでしまったとき、通りすがりの人が「大丈夫？」と声をかけて、荷物をかごに入れ直したり、自転車をおこすのを手伝ってくださったとき。

たとえ自分と全く関係のないことでも、気にかけて、助けてくれる優しさに心をうたれ、自分もそんな人になりたいと思った。



バスに乗っている時に、泣き止まない赤ちゃんに、周りの人が悪口を言って、お母さんが、バス停じゃない所で運転手さんに「降ろしてください」と言ったが、運転手さんがアナウンスで「赤ちゃんは泣くのが仕事です。もう少し乗せてあげても良いですか」と言ったとき。

その時、私はすごく頭がいたかったのですが、運転手さんのおかげで、すごくスカッとした。それからは、赤ちゃんが泣くのは当たり前と思うようになった。

私のお母さんが入院しているときに、私は長女だから、夜遅くまで家事をして、朝は早く起きてご飯を作るような生活をしていたら、お父さんに、「もうちょっと皆を頼りや。お父さんもおるねんから」と言われたこと。

目の下にくまができるまで遅く、かつ勉強もしていて、大変だったけど、「あんたが体壊れたらあかん」って言って、普段あまり見ないような親の顔をみて、かっこいいなと思った。

小学生の頃に、近所の小学生が田んぼに落ちたのを私のお母さんが助けて、家に帰ってタオルまで持ってきて、そんなお母さんに「なんでそこまでできるの？」ときいたら「あたりまえのことやから」と言われたとき。

まだ小さかった私が、お母さんのその言葉をきいて、「自分のことだけしてちゃダメだ」「助けて、助けられて生きていかないといけない」と思って心を動かされた。

バスで、まつりから帰ろうとし、バス停に行くと、思っていた以上に人がいた。友達とどうやって親に遅れることを報告するかでなやんでいたとき、後ろのおじさんが「これ、つかう？」と携帯を貸してくれて、感謝を伝えると「そのぐらいいいよ。でも、もし、こまっている人がいたら助けてあげて」と言われたとき。

いままで自分に関係がないことは無関心だったけれど、周りをしっかり見るようになり、「助ける」ということができるようになった。

友達が泣いていた時に、私の隣にいた子が、その子のそばにすぐ行き、理由も聞かず落ちつくまでずっと抱きしめてあげていた。

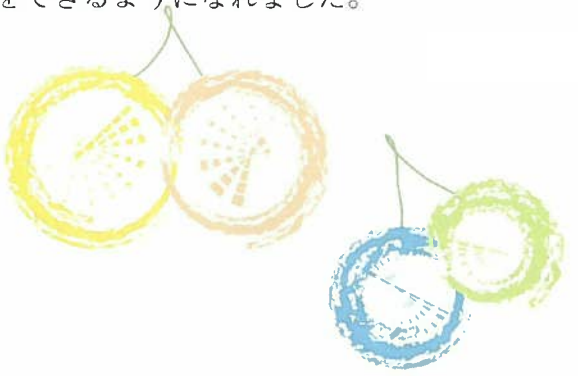
本当の友達がいるということは、とてもすばらしいことで、そんな友達を大切にしないといけないなと感じ、私も、すぐに行動できるようにしたいと思いました。

バスの運転士さんが、予定の時間より遅れてバス停に到着し、バスをおりる時に、「暑い中またせてごめんね。気をつけて帰ってね」と声をかけてもらった時。

ささいな気づかいをしたいと思った。

総体ダブルスで、自分のミスで負けてしまって悔し涙を流していた時、先輩に「最初で最後のダブルス、最高に楽しかった。辞めずに続けてよかった。ホンマにありがとう！」って言われたとき。

ダブルス嫌いで「嫌」とかたくさん言ってきたし、自分のミスでおわったのに「ありがとう」っていう一言で、もう文句言わずにだれとくんでも感謝できる人になりたいと思った。そのおかげで、今は部長をできるようになれました。



病気になって、病気が治ったものの、病気になる前にしていたようには仕事ができなくなってしまった父が、七夕の日のたんざくに「普通の父親になりたい」と書いていたこと

父のそんな気持ちも知らずに、家の通路をゆっくり歩いている父に向かって「邪魔だ」とか、ベッドで休んでいる時には「少しは動いたら」とか、ひどいことばかり言ってしまっていたと後悔しました。父は父なりに精一杯頑張っていることを考えて、父を応援できるようになりたいと思いました。

わたしの祖母は、たくさんの人に慕われ愛されています。そして、自分より相手の幸せを考えています。そんな祖母に中学のとき「なんでおばあちゃんってそんなに優しいの？」と質問したとき。

祖母は「毎日毎日生かさしていただいてる。ありがたい、ありがたいって感謝していたら自然と周りや人のことを大切に思えるし、自分より相手のことを考えたら、いつか自分が困ったときにいいようにかえってくるよ」と言いました。それを聞いてわたしは、今までの自分の行動や言動を深く反省しました。そして、それと同時に、そのことに気づかしてくれた祖母に感謝し、祖母のような人間になりたいと思いました。

少し年配の方が電車に乗ってきたとき、知らないお兄さんが自分の座っている席から離れているにもかかわらず、おばあさんの側に行き、席をゆずっている様子を見たとき。

私も他の乗客も優先座席に座っている人がかわるからいいだろうと他人任せにしていたが、困っている人がいたり、大変そうな人がいたりしたら積極的に声をかけて手助けをするのが大切だと思った。他人任せではなく、自分から行動を起こしたい!!

当時、３歳の娘と生まれたばかりの息子の世話でいっぱいいっぱいだった私、ちょっとしたことでもイライラしていたと思います。そんな時、３歳の娘に「おかあさん、わらって」と言われました。

その瞬間その言葉がズキンと胸につきささり、目の前にあった鏡を見て、笑顔のない自分、笑っていなかった自分に気づかされた。子どもに申しわけなく、涙がバッとあふれでた。たくさん、あやまった。でも、その言葉によって、いっぱいいっぱいだった心の中が、スーッと風が通るように楽になっていくのを感じた。

なかなか言うことをきかない4才の息子に「言うことときかれへん子は嫌い!!」と言ってしまったところ、息子が泣きながら「ぼくは好き〜!」と言ったこと。

本当は息子のことが大好きなのに、ついイライラして「嫌い!」と言ってしまったことを反省した。心にゆとりをもって子育てしていきたい。

小学生の頃、ボランティアで募金箱を持ってスーパーの前に立っていたところ、一旦通りすぎた派手目のお姉さんが「ごめんね、細かいお金がなかったから、くずしてきてん」と言いながら1,000円も募金してくれたとき。

わざわざお金をくずしてまで募金してくれたお姉さんの親切な心に感動するとともに、派手なお姉さんは、多分、募金には興味ないやろなと思っていた自分がとてもはずかしくなった。人は見かけで判断してはいけないと思いました。

小学校４年生の頃だと思います。近所の銭湯で湯をかぶっていた時に、あやまって隣りの住職さんにかけてしまいました。すぐ謝罪の言葉が出ました。住職さんは、私のあやまった態度がいいとホメて下さり、君の背中を洗ってやろうといわれ、私の小さい背中を温かいタオルで洗って下さいました。

私は、このことから後日、父と銭湯で一緒になった時に、思い切って父の背中を流しました。無言ではありましたが、肩越しに父の嬉しそうな顔が見えました。住職さんは、身をもって親孝行の楽しさを教えて下さったのです。

あとがき

第5回目となりました「市民が創る まあるいココロ あったかメッセージ'16」は、テーマを「わたしの心にひびいたあのシーン」と題し、誰かのひとことや何かのできごとをきっかけにあなた自身の考え方や行動が変わった体験をお寄せいただきました。

メッセージは学校関係者をはじめ市民の皆様から、3,666点もの応募をいただきました。どのメッセージも他の人を思いやるやさしい気持ちが伝わってくる素晴らしい作品でした。本当にありがとうございました。

今回、メッセージは小学生から84歳の方まで、幅広い年代の方から応募いただきました。その中から28点を選び、「じんけんリーフレット」に掲載しました。

このリーフレットが皆様の手元に届き、あなた自身の行動を変える勇気や、明日への希望へとつながりますよう心より祈っています。

市民が創る

まあるいココロ　あったかメッセージ '16

～ 私の心にひびいたあのシーン ～

発　　行　2016(平成28)年11月
メッセージ　三木市在住・在学・在勤の皆さん
イラスト・デザイン　小塩 雅子
編集・発行者　三木市人権・同和教育協議会

ま・あ・る・い

ココ

あったかメッセージ'16